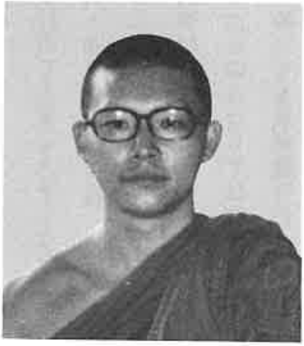
●タイ留学僧現地レポート

カオ・パンサー(Khao Phansah)雨安居を了えて

梅田尚平



佛教大学文学部佛教学科卒業
総本山知恩院に於て伝宗・伝戒道場成満。
昭和38年熊本県生まれ。

I

タイにおいては仏教を国教と呼んだとしても決して誤りではない。国教という意味ではバンコク市内に王立寺院が百六十一存在しており、タイ国憲法第二十六条では、国民の信仰の自由は認めているが、国王は仏教徒でなければならず、かつ仏教の擁護者としてあるべきことが述べてある。そして国家が国庫予算から仏教の保護発展の為、支出していることも明らかである。

実際、国民の九三・六%は仏教徒であり、タイの男子は二十歳になれば個人の事情により時期の相違はあるが、一時的に出家得度しおよそ三ヶ月間僧院において修行する慣習がある。いわゆる風習のようなものであって強制や法律的義務ではない。しかしこの入門修行の経験のない者は官庁に就職する時や昇給兵役義務の軽減などの考慮の際、不利なことがあることもいわれている。従ってこの国では仏教は法の規定する以上に国民生活に大きな影響を与えていると思える。

南方上座部仏教の国では僧は完全に出家し社会生活から隔絶された僧院において仏道修行に専心している。そしてその僧達の行いがその国の宗教意識の骨組みを形造っているといえる。学校教育では教科書によって知識的観念的効果がもたらされ、徴兵制または志願制兵役の国においても兵役教育は訓練によって規律や服従を教え実践的な面において学校教育を補う効果があるといえるが、僧修行は義務や強制によらない内在的な信仰実戦の陶治ともいうべき効果として国民に対し大きな意味を持つものと思われる。

入門修行の年令は普通は成年に達した二十歳からである。ワットパクナムの今年の新参比丘は百六十五名で平均年齢二十五、八歳、最高齢四十八歳、また未婚者が全体の八割を占め、三ヶ月間比丘として僧修行を了えたのちいわゆる成人として社会的にも一人前として認められた上で結婚するのが理想的な形となっているようであり、一種の通過儀礼としての機能を果たしている。入門の時期としては年中どの時季とは限られてはいないが、おおむね、タイ暦のカオパンサー、すなわちタイの陰暦八月の新月の第一日（陽暦七月頃）に入り、オクパンサー（Wanok Phansah）、陰暦十一月の満月の日（陽暦十月頃）に出ることになっている。今年のパンサーの入りは、八月一日、オクパンサーは十月二十八日であった。

おりしもこの三ヶ月間は、タイの降雨の季節でもあり、一日に一度は夕立が来る雨季であり、この間比丘は旅行をさけ禁足し、夜の外出は許されず終日僧院に留まることになる。

午前四時には起床し、五時からの指導僧による教典読誦の講習と朝課、朝食をはさんで休息ののち八時からパーリ語演習、仏典講義、仏教史、宗教儀礼等の勉学、十一時の昼食ののち二時から同じく教理学校へ赴き、休息をはさんで夕課、瞑想という過密スケジュールをこなしていかなければならない。

一九八二年の文部省宗教局の統計年鑑によれば、タイの全仏教徒中、黄衣をまとう比丘の総数は二七四〇

五八人で成年男子の約二・七％でうちサーマネーン（沙弥）二十歳未満の見習僧は一三三八〇三人で歴史的にみて修行経験者は六十歳、七十歳代は九七％であるが、三、四十歳代は三十％以下に下っていて、毎年若い人の入門修行者が減少してきている傾向にあるといわれている。

私が九月二十五日にワットパクナムで今期修行している新参比丘（ピクナワカ）（一六五名に対し九五名の解答者）に対して調査したアンケートの統計からみると、新参比丘の四三％までが仏教について勉強したいと答え、そして両親に対する恩返し（両親に功徳を積ませる）の為二三％ということが、入門修行の動機の上位となっている。その他に、自分自身の信仰を得る為、結婚の前に修行しておく、習慣だから、修行した後の状態（将来の展望）が良好となる為、黄衣にあこがれて、等でおもしろいと思ったのに性欲の克服というのが九・七％あり、私の友人のピクナワカなどは現在奥さんが妊娠中でその間の浮気封じの為に修行させられているのだなどと冗談をとばしていた。また何故ワットパクナム寺院を選んで得度を受けたのかという質問には、ワットパクナムは瞑想修行の寺として有名であること、そしてその実践の為の設備と教授陣の充実をあげ、還俗後の在家信者となってからの宗教儀礼もあわせて勉強できることが八一％を占め、それに加えて前住職チャオクン・プラ・モンユン・テープムニー師に対する尊敬の念が彼らをこの寺へ向わせたようである。職業別にみても内務省に勤務するものが二〇％銀行員や大学生、そして海軍や陸軍に所属するものが一般的に多く、三ヶ月間の有給休暇をフルに利用できる職種が有利であり、一般商店や販売業につくものは公的機関に努めるものより不利であり、あるナワカなどは、僧修行の為にホテルのベーカリーを解雇され、それにもめげずひたすら修行に励んでいた。

II

七月三十一日にアーサラハブーチャーといわれる初説法祭が行われた。この祭日は、入安居カオ・パンサーが始まる前日に行われる祭典で、釈迦が覚りをひら

いて六十日後、ベナレスのイシパタナ Isipatana の庭園で五人の修行者に初めて法を説いたことを祝うものでこの日ワットパクナムにおいても雨安居に入る修行僧達の為に日常生活用具（傘、石鹸、薬品、浴衣等）が多くの信者の方々から供養された。八月一日は入安居カオ・パンサー、この日パクナム寺院に所属している全比丘がそれぞれパンサー歴の順に布薩堂（uposatha）ウポーサタに集合し、全員出席が確認されたうえで今年の安居に入行することを仏陀に誓う式が行われた。私はこの式に参列していてアユタヤ様式の流れを汲むプラッタループ（仏陀像）の端整な顔立ちと視線をやや下にむけた眼差しから近づくことの出来る人間として非常に親しみを感じたことが印象に残っている。パンサーの期間はそれまでの個人にゆだねられていた修行形態から古参比丘からは新参比丘に対する指導が行われ、仏教の教義が伝えられ、僧院内における集団生活の体験と二二七の厳格な戒律遵守の実践にはもっとも最適な時期となっている。

午前四時に廊下に鳴りひびくベルの音で目がさめる。洗面と水浴ののち、黄衣を着用しまだ明けやらぬ空に吹く涼しい風に打たれながら布薩堂へ向かう気分はすがすがしいものである。チャオアオワット（住職）の戒律と僧としての生活上の訓示ののち、朝課（タムワットチャオ）thamwatchao があり、それから斎堂 Sala において朝食をとる。この寺院においては斎堂で食事の供養を受けることはすなわち托鉢と同じ意味にあたる。朝食ののち供養者の為にプラパリット Phraparit（護呪経）を唱え祈念を捧げる。

八時からは教理学校においてパーリ三蔵、戒律、仏教史、宗教儀礼の四科目にわたり、四人の教授陣によって講義が行われる。古参比丘達は同じくこの教理学校において、「ナクタム教理試験」の上級合格の為に、また同じく「パリエン」といわれるパーリ語試験の昇段合格の為それぞれサーマネーンも含めて真剣に勉強おもに暗記に励んでいる。十一時の昼食をはさんで二時から同じく教理学校で勉学の時を過ごす。入門修行

の動機に仏教を勉強したいという答えが多かったように総じて新参比丘の授業態度は熱心であり、予習復習もよくやっているようである。サーマネーンなどは皆が起き出す前から一人庫裡の廊下に出て何やらパーリ語を繰り返し暗誦している。なにしろオクパンサー近くに行われる最終試験に合格する為に真剣に努力している様子を見ていて頭が下がる思いであった。競争心旺盛なようで、発表の日、廊下の隅で一人悔し涙に咽んでいたサーマネーンの姿がとても印象に残っている。

午後五時からの夕課（Thamwatjen）が始まる前は必ず新参比丘と古参比丘がその日の戒律違反について互いに聴聞しあう形式によって懺悔が行われる。通常六時三十分からワットパクナムでは瞑想堂において一般信者メーチー（八戒を守り僧院で奉仕活動をしている女性仏教信者）サーマネーン、比丘等、約二百名程が「念処経」（Satipatthana sutta）を基本とした前住職（Chaokhun Phra Mongkol Thepmuni）チャオクンプラモンコンテープムニー（一八八五――一九五九）の彼独特の実修法によりダンマカーヤ（Dhammakaya）と呼ばれる瞑想を行っている。この念処経には不浄観により世間に対する執着から離れることが説かれてある。私は同僚僧に誘われてある日マヒドーン大学医学部に隣接されるシリラート病院において比丘に公開される解剖を見学させてもらったことがある。この不浄観による瞑想法は地方寺院においても多くみられたが、都市部のこのパクナム寺院ではあまり強調されていないように思われる。

このワットパクナムには、幾人かの瞑想の指導的立場のチャオクン（Chaokhun）やプラクルー（Phrakhru）がおられ、それぞれ個人の庫裡においても数人の弟子達や一般信者が集まり、個別に指導を受けている。副住職（ローン・チャオアオワット）で一等瞑想指導僧官の日系二世河北国雄師（Chaokhun Davana Kosol Thera）がこの僧院では前住職の法灯を継いでおられその名声は内外にもひろく届いている。三十年のパン

サー歴からはさすがに深い境涯を感じさせるものがあり瞑想の大家として多くの信者達から信奉を集めておられる。私もこのチャオクンから親しくご指導を仰ぎ、実修していたが、私の場合結果のことばかりが気にかかり、瞑想をするとどのような効果があらわれるものかなどと行う前からこのような軽薄な考えが頭の中を支配していたが、考えればよけいできなくなるものである。私はチャオクンから「疑いをもたず意の置きどころ（腹部の臍の上二本指のところ）に外でなく内に心の眼を集注させる」ことについて詳しくご教示をいただいたが、Samatha（止）とVipassana（観）を含むこの瞑想法については注意力散漫な私には容易ならぬことで心で心をコントロールすることの難しさを感じざるを得なかった。タイにはおよそ四十通りの瞑想法があるといわれているがいずれも上座部仏教の基本的な、戒・定・息の三学が密接な関係を保っており、その中での瞑想は上座部仏教の（定）の中核となる修行法である。夕方になると一般在家信者達もそれぞれの仕事を了え思い思いに瞑想堂へ集まってきて共に静慮の時を過ごすがやはり私には世間の煩雑な社会から離れ、極力むだなエネルギーを消耗させないようにしている戒律に根ざした生活をしている僧の方が意識を集中し易い環境にあり瞑想には有利のように思われる。瞑想が終わるとそれぞれ庫裡にもどり就寝の時まで自由な時間となる。私はこの僧院においてタイの比丘をはじめ、スリランカ、バングラデッシュ、ネパール等数多くの外人僧と交流を持つことができた。特に三人のスリランカの比丘からは共に日本語を教えて欲しいということで親しくなり、ワットサケーからも通ってくるという熱心さである。スリランカの日本語熱は非常に高いようであるがタイではやはり英語が話せることがまず先決であるように思われる。スリランカの比丘からは、カーストによる所属ニカーヤ（派）の違いから彼らどうしの目に見えない軋轢を感じさせてもらったし、タイにおけるスリランカ仏教の勢力の盛り返しを計る為、近々スリランカ寺院を建立する計

画があるらしい。またスリランカブディストソサエティ主催の会議に出席させてもらった時に初めて足を洗ってもらったこと、プラパリット読誦の相違、食事作法等、いろいろな面でよい経験となり、スリランカ上座部仏教の一面をみせてもらった。反面タイの新参比丘達との会話からは一時的な僧修行という点からも日常真剣に仏教に関する会話はあまり出ず、もっぱら世俗的な会話に終始していた為、俗っぽい話の中から俄僧である現代青年のもつ一般的な考え方をうかがい知ることができた。

Ⅲ

パンサーも後半に入り、十月十二日十三日と二日間にわたり、ワットパクナムでは（カターーバンテエーマハーチャート）が行われた。この行事は仏教と民族信仰が結びついたもので二日間に幾人もの比丘が二人向い合って高座に上がりパーリ語によるバイタラを独特の節まわしをつけて読誦しあう。信者達の捧げるろうそくの灯が印象的でこの日は数多くの在家信者も一様に白衣を着用し、寺に詣り戒を守り、寺に対する寄進行為によって功徳を生み出す（Tan Bunn）のである。すなわちこのタンブンによって功徳を得る(Dai Bunn ダイブン）ことでこれがタイにおける民衆の信仰実戦の基本的原理となっている。このマハーチャートの功徳が、彼らにとって現世において災難からのがれ幸福を勝ちとるという積極的な目的を持っている為、最終日の午後九時に始まるサーイシン（Shaisin）ブン転送の儀式のころには斎堂いっぱいに埋めつくした信者達の中に一種の興奮した空気がただよう。安置された仏陀像の牛に巻かれたサーイシンの糸玉を伸ばし斎堂にめぐらされる。そして鉄鉢に三回巻き余った糸を親指と人指指の間にはさんで合掌し「守護の呪文プラパリット Phraparit」をパーリ語で読誦する。比丘の読誦する呪文のもつ神秘的な霊力によって人々の厄を除き、幸福をもたらすと信じられている。読誦が終わると上座の比丘がサイシーンを切る。これを合図に信者も比丘もそれぞれ霊験灼かなこの糸の争奪戦が始まる。

そのすさまじさは私など何が起こったのかわからずにしばし呆然としていたほどである。それからチャオアオワット（住職）によるナム・モン（聖水）をかけてもらうことになるが、このナムモンが始まった瞬間、私の近くにいたピクナワカ（新参比丘）が急にうなり声をうあげ四つばいになってあばれだした。その力は想像を絶するもので五人がかりでやっとおさえつけることができたが、あきらかに人知のおよばない何かの力が加わったとしか考えられない状態であった。彼れは背中一面に Sak という虎の入墨をしており、ナムモンの威力で彼についていた邪悪な何ものかが苦しみのあまり除れようとした為におこったものらしい。正気にもどった本人は一時放心状態であったが、しばらくして何ごともなかったようにケロッとしており、何も覚えていないといっていた。私は今までにこのような現象を目前にしたことがなかったので、この国における宗教儀礼の中でのサーイシン（聖糸）と聖水（ナムモン）の霊力の重要性をあらためて感じさせられたとともに、一般民衆のこのような呪術的な要求にも答えてきたことが、この国における仏教の広範囲な指示と存続とに結びついてきた大きな要因であると実感した。

十月二十七、二十八日両日にわたりナクタム教理試験とパリエンパーリ語試験が行われ、同時に今期入行者に対する最終試験が行われた。ピクナワカ僧受験者数一六一名中一五五名が合格した。この日、現国王プミポン・アデュンヤデート(ラーマ九世) King BhumiPol Adulyadej が一九五六年十一月に二週間僧修行をされたという王立寺院のボウォニウェート寺院から住職のソムデットプラニャーナサンワラ師 Somdet Phra Nyana Samvara がおみえになり、自らの手で終了証と認定証を一人一人に授与された。私はこの時はじめてソムデットにお目にかかったがその独特の容姿とそつのない身の処し方、その存在だけでまわりの空気までかえてしまうような魅力をもつ孤高の長老比丘としての印象が強く残った。最終試験も無事終わると比丘達も緊

張が解けたように、皆開放的になり心は還俗後のことや、また Pavivatthabbam（パリワッタ）といわれる森の瞑想寺（ワットカマタン）へ遊行に出かける準備に忙しい。

二十九日には安居明けの供養が行われた。いわゆる僧自恣の日でこれは日本ではお盆の行事に当たるものである。仏陀像を先頭に住職自ら托鉢に出られそのあとにパンサー歴の上位の僧から順に続いていく、人々は朝早くからおもいおもいの供養の品と花や線香、ローソクまた白飯を用意しサイバード（施し）をしてくれる。僧院いわゆる僧伽の一員として修行することができない女性達や老人、子供達が僧に供養することによってその神聖さを分けてもらい徳を積ませてもらえるという便法になっている。僧が自ら托鉢に赴き、俗人（カラワート）に徳を積んでもらうことは一つの布施行（法施）であり、僧はカラワートに頭はさげることなくタンブンさせてもらった俗人が合掌して礼拝する。この無言の中に行われる教化活動は、僧の存在の神聖さがあってこそ始めてなされることであり、布教を使命としその教義を押しつけようとする大乗仏教の教化伝導とはまた違った趣がある。

IV

長かった三ヶ月のパンサー修行も幕を閉じた。得度してより六ヶ月を迎え、今までを振り返ってみて自分自身にとって、僧院内での生活やそれにともなう戒律の実践また数多くの未知の体験が様々な形で私に多くのものを残してくれた。タイ社会においてすなわち、僧伽の中においては私は常に雄弁であるように心掛けていた。その為に読み書きはさておいてもタイ語の会話練習には前半かなり時間をかけて少しでも僧院内の比丘とのコミュニケーションをはかるよう努力した。おかげで多くの友人を得ることができた。タイ人の中には多くの親日家もいるが、反面アメリカにおける信頼感や白人文化のもつ伝統や生活習慣に対する理解度もかなり大きなウエイトを占めており、同じモンゴロイド系人種の日本人に対する近親憎悪的な不信や誤解が

存在していることも確かである。しかし僧院内ではおおむね私に対して比丘達は親しみをもって接してくれた。ものごとの外面にこだわるタイ人の外観至上主義は日常の会話の中で頻繁に使われる、「スワイ」美しいや「ダイ」可能を表す、「ケン」上手である等のことばに表される。私が最初に覚えたタイ語もこの三つの言葉でこの短い言葉の中にかなり多くの意味をこめることができるので重宝していた。日本人のように内面を重視し、「沈黙は多弁にまさる」「以心伝心」ということが美徳とされる文化とは異質な部分が多く一般にタイ人は話し好きであり話し下手を嫌うようでよくしゃべる人間が知性や教養の面で優れていることにもなる。私は絶えず比丘に対し僧院内や庫裡においては覚えたてのタイ語を使い比丘達の会話の中へ入っていった。短期間でも同じ僧院で修行し、同じ庫裡に住み同じ釜のめしを食ったという親近感からか打ちとけやすく、私は彼らから多くのことを学ぶことができた。パンサー期間中に仏教がタイの人々の生活の中に深く浸透している実態とそれにともなう信仰の篤さを実際に見ることができ、私自身は釈尊教団の僧伽において悟りへの追体験を味わうことができた。一時僧制度という伝統はタイ社会において国民に大きな影響をおよぼしているとともに、この習慣はこれからも残っていくだろうし、戒律を正しく遵守していくタイ僧伽が「世の無上の福田」としての存在である限り永久に続いていくものと思われる。また私自身としてもタイ社会における仏教僧伽の興隆とその存在の意義を広く知らしめる為に今後も仏教徒としての自覚と誇りを持ってその使命を果していきたいと思う。

最後に上座部仏教の地タイで安居修行の機会を与えてくださった、善光寺海外留学僧派遣育英会の黒田武志理事長に対し深く感謝の意を表すと共に三宝の御加護により一層の発展と興隆あらんことをお祈り申し上げます。

合掌

佛暦二五二八年十月二十八日　出安居ワットパクナム

梅田尚平　拝